
幻想の世界

夜光狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想の世界

【Nコード】

N0279B

【作者名】

夜光狼

【あらすじ】

死んだはずなのに、生きている。知らぬ世界に来てしまった凜はその世界で様々な仲間に出会い、様々なことを体験する。

プロローグ

——自由——

私がずっと求めてきたもの。そして、叶わぬもの。

儚く消え、醜く碎かれ、悲しく手放され、痛く拒まれ、露骨に無視される。

私の求めてきた自由って何？

苦痛のない世界？自分が必要とされる世界？悲しみのない世界？

私の望んだものって本当に自由？こんなもの？

私が私でいられる事が望みじゃないの？差別に縛られないことが望みじゃないの？

もう、わかんないよ。

何も要らない。

何も要らないから、お願い。

神様。

——自由をください——

プロローグ（後書き）

デス・ワールドと同時進行で更新していきます。
飽きずに読めるほどいい作品ではないのでご了承を…

墮とされた【天使】

いつに無く澄み切った空、さんさんと照りつける太陽。涼しく吹く風。

そして私は屋上にいる。平和な時間をすごしている。はず。普通なら、そう。

でも、私が屋上にいる意味は一つ。決まりきった事。

——イジメ——

悪口を言われ、靴を隠される。そんな程度の低いものならいい。でも、私の受けているものはそれと比べ物にならないほどのイジメ、よりも酷いイジメ。

コンクリの地面に叩きつけられ、背中を踏まれ。血反吐を吐いても止める事の無い。体が悲鳴を上げて、口から悲鳴が出ても止める事の無い、殆ど【拷問】に近いもの。

屋上の床にごく薄く残ってる赤いしみは、全部私の血。一見さびにも見えるけど、違う。

流れる私の血を見ると、いつも思う。

——ワタシハイジメノドウグナンド、ソレシカツカイミチノナイモノナンド——

体中の痛みも耐えがたいけど、心の痛みの方がもつと耐えがたい。もう、気絶した方が楽かな。

「そろそろ帰ろうぜ。」

「ねーねー、こんなのほつといてカラオケ行こうよー」

はい、アソビ終了。今日も楽しく帰りましょう。あいつ達は気絶寸前で横たわる私を放って何処かへ歩いていく。

今日も、よく頑張りました。私に拍手。パチパチパチ。

「って・・・いた・・・い・・・」

こんな状態になっても声が出せる私って凄いと思わない？これも毎日のイジメのおかげだよ？ありがたいよねー。

・・・正直つらい。このまま消えてしまいたい。

この瞬間が一番やだ。だって、自分の非力さが目立つから。本当、情けない。

——バカミタイ——

死んでもいい？いいよね？誰も気にしないし。

このままフェンス越えて飛び降りれば楽になるよ？

——ジャア、シノウ——

ほら、すぐ下で死が手招きしてる。

このまま片足上げて、そう。次はもう片足をずらして、ほら、フェンスに掴まつてる手を放せば一気に。

片手が離れる。後はもう片手。小指、薬指、ああもう・・・一気に離す。

——自由——

『ゴッ・・・』

嫌な音。

うわ・・・血が止まらない。

水溜り作っちゃってる・・・でも・・・これで楽にな・・・れ・・・る・・・

迷える【子】

周りは真っ暗。

そうだ、私死んだんだ。こう、頭から落ちて。・・・これがあの世？

—— お前にはまだ早い——

突然、私の耳元で声が聞こえてくる。

「誰？」

—— まだ人生の半分も生きていないのに自ら命を断ち切るのか？

「仕方ない・・・よ。あんなことされ続けたら死にたくもなるよ・・・」

何故かベラベラと喋れてしまう。

—— お前にチャンスをやろう——

「チャンス？」

私は思わず声を大きくする。

—— お前が行く世界は... そう、【異世界】——

「え？イセカイ？」

突然、目の前が明るくなる。

「っ・・・」

—— 自分を変えていきなさい——

次に目を開けたとき、私の目の前には木々が広がっていた。

「何処？」

全く持ってみた事無い景色。道路らしきものも、看板も無い。ふいに自分の体に違和感を持った。

「何かが・・・違う？」

試しに伸びを試してみる。

—— ガサッ——

背中では何かがすれる音が聞こえる。

「ガサツ・・・って」

恐る恐る首を後ろへ向ける。

「つつっ!？」

背中からは人間の構造上、出てくるはずの無いものが有った。

丁度肩甲骨の辺り、灰色と白が混ざった羽根が生えていた。肩から伸び、てっぺんは頭の高さ、底はふくらはぎの辺りまで伸びている。

「羽根え!？」

悲鳴に近い声を出す。

次にハツとなって頭の上を触る。そしてほっとした。

「わっかは無いんだね」

段々と一人で虚しくはじけてる事に恥ずかしさを覚えてくる。

「ウウウウウ・・・」

突然、背後でうなり声が聞こえる。

「今度は何？」

草むらから赤い光が二個、ちらりと見える。そして、飛び出してくる。

「グギヤアッ!！」

狼、に近く猫に近いよく分からない形をした化け物。それが3メートルほど飛び上がって飛びついてくる。

狼猫はものすごい速さで私にかぶりつく。鎖骨の辺りに痛みが走る。

「つつ・・・」

私はなすすべなく倒れこむ。

「グルルル・・・」

狼猫は牙を光らせ、喉にかぶりつこうと準備する。その時だった。「見殺しにするなど良心が許さん!成敗!！」

叫び声が響き、その後に何かが飛んで来る。

『ベギッ』

「ギャウっ!!」

狼猫は頭部を強打され、そのまま首をおかしな方向にねじまげ、飛びのいた。そしてそのまま走り去る。

「ウルキヤットごときが天使に噛み付いていいと思っているのか？」
草むらから悪態をつきながら神父のような格好をした人が出てくる。

「大丈夫か？」

脇に屈み込む。そして私の鎖骨の傷に指を当てる。

「ヒール」

一瞬緑の光が瞬いたかと思ったら傷が消え去っていった。

「これでよし。それで、何処のひとだい？多分ベリエあたりだろう？」

「いえ、・・・分らないです」

神父の格好をした人は怪訝な顔をし、次に納得したような顔になる。

「ああ、向うの世界から来たのだろう」

「多分、そうです」

「おお！グランリアよ！私、ウエイルは神聖なる天使にめぐり合う事が出来ました！これもあなたの私のための褒美なのですね！」

神父・・・ウエイルは空に向かって叫びだす。

「・・・あの」

私は恐る恐る声をかける。

「ん？ああ、失礼。俺はウエイル、ビショップ・・・まあ、聖職者って言うのかな？」

「えと、凜です」

ウエイルは少し微笑む。

「敬語は使わないでくれよ？これでも17歳なんだ。それで、リン。お前はメル・コアを使えるか？」

「え・・・メ・・・ル？」

ウエイルは自分の額を叩く。

「何も知らないか・・・まあ、いいや。後で教えるから移動しよう、近くに神殿があるんだ」

「は、はい」

ウェイルはさっき投げた棒状のものを掴んで歩きだす。

「さ、行こう。」

迷える【子】（後書き）

やっぱり駄文でした・・・すみません・・・

戸惑いの【使い】

「リン・・・だったよな？」

「はい？」

森の中を歩く間、全く何も言わなかったウエイルが口を開く。

「向うで何があった？」

私はその問いに言葉が詰まる。

「え・・・つと・・・」

ウエイルは申し訳なさそうな顔をする。

「ごめん、答えにくいよな？」

それから再びウエイルは言葉を発さなくなった。

死のうとしたらこっちに来てたって言ったらウエイルはどう反応したんだろう。やっぱりに変に思うかな・・・

「えつと・・・この辺だと、思うけど・・・あつあそこ」

ウエイルが指差した方向には真っ白な建物があった。

「あれが神殿。さ、行くぞ」

ウエイルは私を急かすと早歩きで神殿へ向かう。

「う・・・わあ・・・」

神殿内に入った時、私の口からはため息が漏れた。この光景を見て何も思わない人は居ないだろう。

何から何まで白白白。カーペットや中にいる人の着ている服などの色が目立って見える。

「目に悪いだろ？」

ウエイルが茶化すように言う。

『ガタン』

正面にあつた巨大な扉が開き（といっても人一人が通れるくらいの小さな幅）、一人の男が近付いてきた。

周りの人間よりも豪華で、威圧感の有る服を着ている。

「只今戻りました、師長様」

ウェイルが片膝をついて礼をする。

「見る限り、外で何か起こったようじゃの？」

師長と呼ばれた人が私を見る。その眼は青く澄んでいた。

「はい、森の中でウルキヤットに襲われそうになった天使を助けて参りました」

「ほお、よくやった。真界の者か？流界の者か？」

私には話の内容があまり分からなかった。する事といえば自分の羽の羽毛をいじって遊ぶ事だけ。

「流界です。それゆえに色々教えないといけない事もありまして」

師長は穏やかに笑う。

「ほっほっほ・・・そうか。いやいや・・・今日は珍しい事がよく起こるわい」

師長は心底嬉しそうにする。ウェイルは疑問を持ったように聞く。

「珍しい事？」

「そうじゃ。その事については後で分かる事じゃろう。まずこの哀れな天使に休息を与える事が先じゃ」

ウェイルは思い出したように私を見る。

「あ、そうか」

私は神殿の一室（客室？）に通された。

「ゆっくりしとけよ。夕食になったら呼ぶから」

ウェイルはそう言うので扉を閉めて、歩いていった。

「・・・ふう」

私は何気なく背中の中を見る。いつの間にか羽根を動かす事も覚えていた。

「飛べるのかな・・・？」

そうはいつでも試す気に慣れなかった。

『コンコン』

扉をノックする音が聞こえる。

「はい？」

私はまの抜けた声で答える。

ガチャツと扉が開き、誰かが入ってくる。

「あの、天使さんが来られたと聞いたので・・・挨拶しようと思つて・・・迷惑でした？」

その人は顔色を伺うように、というよりも極度の緊張を感じさせる声で聞く。

「いえ、・・・と・・・挨拶だなんて・・・恐縮です」

知ってる単語を掻き合わせて変な会話文を作ってしまう。

その人の服装は灰色のローブに袖を通すだけで前は留めず、上下の黒の服を着ていた。

「えと・・・リリアです」

慢性型の緊張系少女——リリアは控えめに自己紹介をする。

「一応、神獣使いです・・・あつ、一応ですよ？そこまで能力は無いんで・・・」

「シンジュウツカイ？」

私が聞くとリリアは意外、というような顔をする。

「知らないんですか？」

私は急に恥ずかしくなってくる。

「あ・・・ちよつと事情があつて・・・この世界についてよく知らないんです」

私がそう言うとしりリアは納得する。

「そうですか。神獣使いつて言うのは・・・簡単に言えば、召喚師みたいなものです」

「大体予想がつきます・・・」

リリアはハツとする。

「あ、すいません！私みたいに能力の片鱗も満たしてないような人間が偉そうに説明なんて・・・」

「いえ、大丈夫ですよ？」

私はよく分からない勢いに押されて慰める事しか出来なかった。

「あ・・・天使さん、失礼ですがお名前は？」

唐突にリリアが聞く。

「凜です。」

リリアが名前を復唱する。

「リンさん・・・分かりましたっ」

『コンコン』

ドアが鳴る。

集う【変人達】

「メル・コアってのはだな・・・」

夕食の席でウェイルが熱弁を始める。いや、私に知識を与えるための授業、といった方がいい。

「何かをきっかけに発現、発動する技のことだ。例えば死の淵に立った時、怒り狂った時、深く悲しんだ時などの場合に発現しやすい。」

その短い序章の説明で私の脳の回路は一つ一つ音を立ててショートしていく。

「は・・・はあ・・・」

ウェイルは気にも留めないように説明を続ける。

「でも発現するのは稀で、しかもその場に応じた技かどうかは分からない。だから死の淵に立った時に千里眼の類が使えるようになりたりも有る。しかしそんな物が命を救うと思うか？無理だろ？だからメル・コアにはギャンブル系の要素も出てくる。」

私の脳の中が見えたらきつと凄い事になっているだろう。言葉だけで脳死状態になりそう。

「ちなみに俺もメル・コアを持っている。この神殿に居る人間は全員持つてるかな？まあ回復とかもメル・コアだな。」

「大体、わかり・・・ました・・・」

この空間で唯一音が立っているのはこの辺りだけだった。他は静かに食事をしている。それが普通なのだろう、リリアもそれらしく上品にしている（落ち着かない様子だった）。

皿に乗っている物は主に野菜で、肉は少ない。見る限り師長や私、リリアを除いた人間の食べている者に肉は入っていない。それが聖職者の心得なのだろうか。

『ガターン！』

突然、扉が開く。

「すみません！遅れた！」

その人は息を切らしながら搾り出すように言う。

「おおつ、ジェツ殿！何処に居られたのですか」

師長が目を丸くする。ジェツと呼ばれた人は申し訳なさそうに頭をかきながらリリアの横の空いた席に座る。

「ちよつとばかり魔物と戯れてましたもので・・・」

それを聞くと所々からくすくすと笑う声が聞こえてくる。

「ほうほう、それで炒め物はどうでしたか？」

師長がにやつきながら言う。

「いえ、冷凍保存してきました。腐らないように」

皆が笑う中、私は鳥のようにきよろきよろと首を動かして、傾げる。

「リン、あの人は魔法使いだ。リリアと一緒に旅してるらしい」
ウェイルが教えてくれる。

「ジェツ、夕日が沈みかけるころには戻るって・・・」

「ごめんな、アメリカ」

私は更に首を傾げる。リリアってリリアだよね？何でアメリカって・・・あ、苗字とかあるんだ。

「お？新しいお客さんかな？初めまして、俺はジェツ。ハウンドって呼ぶ奴も居るけどな」

ジェツは私に自己紹介をする。

「あ、凜です。」

ジェツはにつこりうなずいて食べ物に目を移す。そして上品に、そして豪快に食べ始める。リリアは再び神経質に食べ始める。

『ガタッ』

扉の外で物音がする。全員の出す音が止み、空気が張り詰める。

「師長、客人のようです」

「客人か、誰か迎えに行きなさい」

その声で一人が立ち上がり、部屋を出て行く。

その数十秒後、張り詰めた空気は叫び声で途切れる。

『ぐ・・・あ・・・あああああああ！！！』

リリアはビクツとしてジェツに寄り添い、ジェツは何かを呟く。

「面倒だな」

ウエイルは唇をかみながら言う。

「師長、私が行きます」

ウエイルが立ち上がって言う。

「うむ、怪我は最低限に抑えるのじゃぞ」

師長は止めなかった。

「では、俺も行きますよ、アリシアは待ってる」

ジェツが立ち上がる。師長は何かを言おうとしたが止めた。

「魔術師さん、行きましょう」

「敬語は止めてくれよ？」

ウエイルとジェツが目をかわし、外へ出て行く。

「さあ！今すぐに寢所へ向かえ！扉は硬く閉ざし、開けるでないぞ

！」

師長の指示で全員が行動に移った。

侵攻する【猫狼】 忍び寄る【敵】

「リンさん！早く！」

リリアが急かす。私は出来る限り速く走る。

『ガタッ』

突然、リリアの前に影が飛び出す。日が落ちたため、蝋燭の明かりが頼りだ。

「ウウウ・・・」

犬のような唸り声。

「召喚！火の粉を撒き散らし、全てを灰と貸す精霊よ！その姿をここに現し、魔なる脅威を焼き払え！フレイムインセクト！」

リリアが手を前に突き出して叫んだ瞬間、少し前方の空間が燃え上がり、赤い甲羅に覆われたカマキリのような形をしたものが姿を現す。リリアの顔は恐怖に引きつっていた。

赤いカマキリは狼に狙いを定め、鎌を振り下ろす。

『ジュッ』

何かが蒸発する音が鳴り、狼の体が燃え盛った。狼は悶えることなく倒れる。

「さ・さあ、い・行きましょう」

リリアは私とカマキリに合図を出し、走り出す。

「おらあー！」

ウェイルはホールを振り下ろし、猫狼を殴りつける。猫狼は猫のようにギャッと叫び、その場に落ちる。

ジェツは長さ90センチくらいの鉄で出来た杖を両手に持ち、殴りつけ、魔法を発動している。

「うらー！！ファイア！グラビティ！グラビティ！」

一匹は頭を碎かれ、一匹は燃え、もう二匹は平たく潰れてそこら辺に転がる。

「一気に扉を閉めましょう！」

ウェイルが近くの猫狼をなぎ倒しながらジェツに指示を出す。

「そうだな！リモート！」

ジェツが唱えると扉は閉まり始める。閉まる前に猫狼達がなだれこむ。

「鬱陶しい！」

ジェツが悪態をつく。扉が完全に閉まり、入りそびれた猫狼は扉に挟まれるか、激突するかで絶命した。

「ウェイル！下がってろよ！フレイムカーテン！」

中に入ってきた猫狼達の上に炎の膜が広がる。そしてゆっくりとたなびきながら落ちる。

『ジユウツ！』

肉の焼ける臭いがたちこめる。

猫狼達はもがきながら死んでいく。毛は焼け落ちて焼けた皮膚があらわになっている。

「これでよし。あとは奥に入った奴を探すぞ！」

ジェツ走り出す。

「ここへ！」

リリアが倉庫の扉を開け、私を誘導する。カマキリは既に消えていた。

私が入るとリリアは扉を閉め、鍵をかける。

「しばらく隠れましょう」

ここには十字架やら聖書、ホールや崩れた女神像が置いてあった。意外と清潔にしてある。

外は狼達がうろついている。私達がここにいるのは気付いていないようだ。

「ここにいれば安全ですね」

「でも、どうやって逃げます？いつまでもここにいるわけには・・・」

「

私が一番の問題点を口にしたとき、崩れた女神像の上から声が響いた。

「安心しろ。お前達が狼に殺される事はない」

ビクツとして振り返ると女神像の上に男が立っていた。蠟燭の光では見えにくいだが、大体確認できる。

「俺に殺されるのだから」

男は私達に手をかざすと何かを呟く。

リリアは素早くカマキリを召喚する。

「。。」

『バシユウツ』

突然カマキリが弾け飛ぶ。リリアは驚愕している。

「な・・・なにが・・・？」

男はにやりと笑う。

「。。」

再び何かを呟いた瞬間、私達の周りの影から手が出現する。その手が首を掴み、鳩尾に拳をめり込ませる。

「か・・・は・・・」

「うくつ・・・」

私とリリアはほぼ同時に呻く。首にかかる手は握力を増し、喉を押しつぶしていく。

「っ・・・」

男はさらに呟く。

「。！」

影の手の握力が増していく。気管を圧迫し、体から酸素を追い出していく。

汗が額を流れ、涙が頬を伝う。

「もうすぐ楽になる」

男は楽しそうにその様子を眺めている。

段々と私の意識が薄れていく。

実感する【無力】

死ぬ、死ぬ、死ぬ。

頭が真っ白になっていく。既にもがく事はやめた。

—— イツカイシンデルンダカラ ——

そんな言葉がよぎる。

「もうあきらめたか」

男はつまらなそうに首を振ると、女神像から降り、私達の前に歩いてくる。そして顔を覗き込む。

「目が死んでるな。これじゃ、もう終わったも同然だな」

男は何かを思いついて手を叩き、影に向かって呟く。

「
」

手が消え去り、首の圧迫が消えて私の体が倒れる。リリアも同じように倒れこんだ。

「ッ……はぁ……はぁ……」

男はナイフを取り出し、私の首筋に当てる。

「言い残す事は？」

『ダアアン!!』

「大丈夫か!!」

扉を蹴破ってウェイルとジェツがはいってくる。

「邪魔が入ったな……消さなければならぬが……仕方ない……か」

男は無表情に呟くと姿を消した。

「消え……」

ジェツが驚く。

「まずは二人を！」

ウェイルが慌てて駆け寄り、私とリリアの頭に手を当てる。

「ヒリング・ハイ」

呼吸が楽になってくる。

「はぁ・・・ふう・・・」

リリアは気絶したのか、呼吸はしているが反応が無い。
ウェイルは安堵し、ジェツはリリアを抱きかかえる。

「おっかねえ・・・」

「リリアを運んでくる」

ジェツは慎重に倉庫から出、部屋へ向かった。

ウェイルは私を起こし、服についたほこりを払う。

「危なかったな」

「あ、ありがとうございます」

ウェイルは微笑む。

「今日はゆっくり休めよ」

「・・・もうこの辺りには居るわけにはいかないか・・・」

ウェイルがため息をつく。

「本当に狙いが天使なのか？」

ジェツが質問する。

「おそらくは、じゃな。魔物を影を操るとなれば、天使狩りの者達
じやろう。そして、いつまでもここにいとまた襲ってくる、防ぐ
ためにはここを離れるしかないな」

師長は困ったように言う。

清々しい朝のはずなのにこの空気は重かった。

「でも、リンを一人で行かせるのは危険です。誰かが護衛しないと」
ウェイルが言う。

「それをウェイル、おぬしに頼もうと思っておるのじゃが」

「え？」

ウェイルが驚く。

「自分にですか？」

師長は頷く。

ウェイルはしばらく黙り込み、顔を上げる。

「喜んで」

またしばらくの沈黙。

私は何も出来ずにいる。

「ああもう！長ったらしい！俺達も行くぜ！」
ジェツが苛々しながら言う。

「え？あ、うん」

リリアが遅れて同意する。

「では、頼む事にしよう。リン、心はよいか？」
師長が聞いてくる。

「あ、はい！」

師長はにつこり頷き、部下に指示を出す。

「朝食の後、4人が出発できるように準備せよ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0279b/>

幻想の世界

2010年10月16日11時16分発行